

2022 年度

システム理工学部

共通科目委員会（語学部会）

自己点検・評価報告書

2022 年 9 月 12 日

目次

第 1 章	理念・目的	1
第 2 章	教育内容・方法・成果	4
第 3 章	学生の受け入れ	9
第 4 章	教員・教員組織	11

第1章 理念・目的

〈1〉現状説明

まず、大学の理念・目的から学部外国語教育に深く関わる点を述べる。

本学の理念・目的は「学術の中心として深く工学の研究を行い世界文化に貢献し、併せて広く一般の学術教養と専門の工業教育を施すことにより、学生の人格を陶冶し、学理を究めさせ体位の向上を図り、もって優秀なる技術者を養成することを目的とする」である。ディプロマ・ポリシーでは3つの学修・教育目標をあげている。すなわち「世界と社会の多様性を認識し、高い倫理観を持った理工学人材として行動できる。」「問題を特定し、問題解決に必要な知識・スキルを認識し、不足分を自己学修し、社会・経済的制約条件を踏まえ、基礎科学と専門知識を運用し、問題を解決できる。」「関係する人々とのコミュニケーションを図り、チームで仕事ができる。」である。

これらの大学の理念・目的を踏まえ、本学部においては「地球的観点から多面的に物事を考える幅広い教養を備え、他分野・異文化と相互理解・交流し、社会や世界の問題解決に取り組み、高い倫理観を持った理工学人材として行動できる。」を学修・教育目標のひとつに掲げている。この学修・教育目標に沿い、世界に貢献し世界の様々な国の人々とコミュニケーションできる能力を備えるべく、本学部では世界の共通言語としての英語、英語圏以外の多様な国の人々とのコミュニケーションツールとしての第二外国語の教育を行っている。

各学科の「学修の手引き」内の「学修・教育目標を達成するための授業科目の流れ（カリキュラムマップ）」には細分化された学修・教育目標が周知・公表されている。外国語教育に関連した学修・教育目標には

A 地球的視点から多面的に物事を考えるシステム思考とその素養（広い視野）

特に、A-2 人間、文化、価値観等についての多様性を理解し、さまざまな立場から物事を考え、行動できる

F 学際的チームで活動できる。（チーム活動能力）

H 論理的な記述力、口頭発表力、討議等のコミュニケーション能力および国際的に通用するコミュニケーション基礎能力（コミュニケーション能力）

等が該当する。こうした学生の体系的・順次的履修を可能にするカリキュラムマップと連動して外国語教育が行われており、各外国語科目のシラバスにも授業の「達成目標と学修・教育到達目標との対応」が上記のA、FやHの説明を用いて明記されている。

さらに、外国語教育、特に英語に関する中・長期計画その他の諸政策について述べる。

各国の共通言語としての英語の必要性は高まっており、就職後や大学院進学後に役立つような英語力、本学部の場合は理工系人材育成として必要な英語力を育てるのに適した語学カリキュラムへの期待が強くなっている。さらに、就職活動時及び大学院進学時等に語学検定試験スコアの提出を要求される場面が増えているため、実用的な英語能力を育むカ

リキュラムの必要性も学生から聞かれるようになってきている。こうした背景から、2012年に語学カリキュラムの強化のため「語学教育に関する将来像検討委員会」（以降、「検討委員会」）が発足した。最終的に「国際感覚を持ったエンジニアに相応しい実践的な英語の4技能（読む、聴く、話す、書く）向上」を方針とする新カリキュラムを2014年4月に答申し、同月の学部教授会に報告された。さらに検討委員会からの答申を受け、その方針を具体化する作業を学部長や語学部会委員を含む教職員から成る英語カリキュラム改革全体会議にて行い、2015年度より実施された。その結果、以下の基本方針が策定され現在に至っている。

1. 基礎的な学術英語の学習から始まり、理工系の実践的な英語に進む道筋を明確にしたカリキュラムとする。
2. 3年次には理工系のプレゼンテーションや、語学検定への対策授業を新設し、卒業後に必要とされるスキルや資格を獲得できるようにする。
3. 4年次進級時の目標とする TOEIC (L&R) スコアを設定し、学習目標を具体化させる。
4. レベル別クラス編制とし、学生の英語レベルにあった学習ができるようにする。
5. リメディアルクラスを新設し基礎力が不足している学生の英語力の底上げを計る。
6. 英語学習サポート室を新設し、英語の疑問や悩みを相談できるようにする。
7. E-learning を全面的に取り入れ、自宅学習時間を確保する。
8. 海外語学研修に参加することにより単位が取得できるような授業を新設し、海外英語研修への参加を促す。

〈2〉長所・特色

本学部の外国語教育では、理念・目的に沿いつつ、社会状況にあわせて求められる人材の育成に向けた基本方針を据え、中長期的な施策を検討している点が長所・特色である。

〈3〉問題点

中長期的な方針および施策をより効果的に行うため、継続的に改善を検討することも必要と考えられる。

〈4〉全体のまとめ

本学および学部の理念・目的に沿いつつ、社会状況の変化による要請に応えるべく計画をたて、外国語教育を進めている。

〈5〉根拠資料一覧

- 資料 1-1： 大学について 建学の精神／理念・目的／3つのポリシー
<https://www.shibaura-it.ac.jp/about/summary/>
- 資料 1-2： システム理工学部 <https://www.shibaura-it.ac.jp/faculty/systems/>

- 資料 1-3: 学修の手引き <https://www.shibaura-it.ac.jp/visitor/student/class.html>
- 資料 1-4: シラバス <http://syllabus.sic.shibaura-it.ac.jp/>

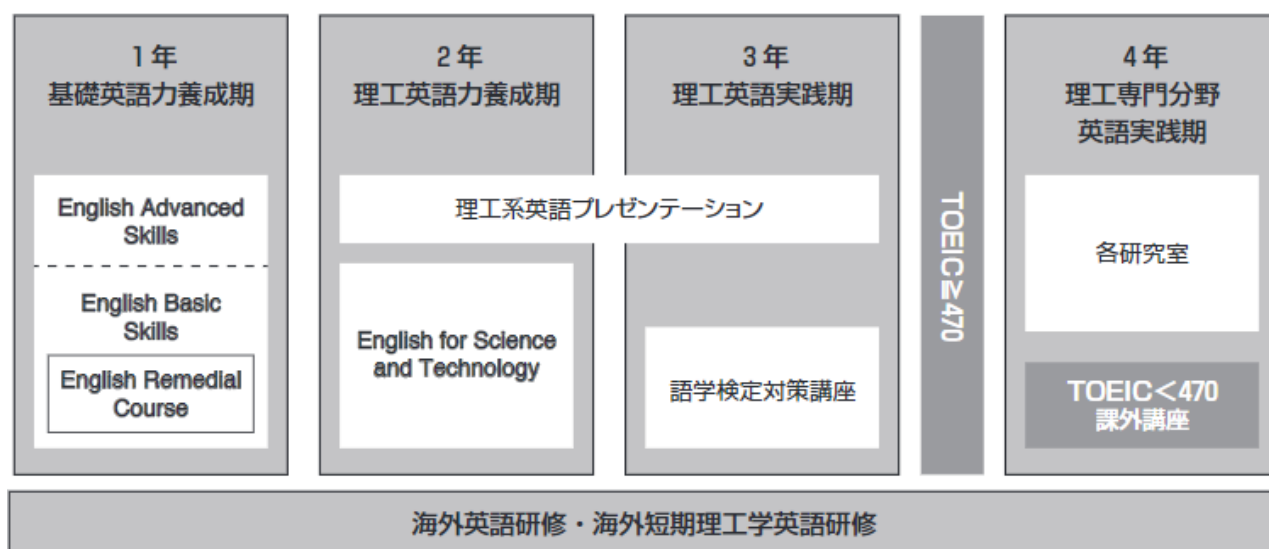
第2章 教育内容・方法・成果

〈1〉現状説明

外国語教育の授業編成・実施方針はその体系、教育内容、授業科目区分、授業形態等について、各年度毎に「学修の手引き」に記載し大学ホームページで公表している。

学位授与方針に関わる外国語教育科目の履修について、本学部では学生は卒業までに英語科目を8単位以上選択して取得することが卒業要件となっており、入学ガイダンス等でも周知されている。また第二外国語科目の履修は、2021年度から「英語科目以外の総合科目」から卒業までに12単位以上を取得する選択科目の中に含まれている。

英語科目については2015年度の中・長期計画により新カリキュラムをスタートさせた。1年次は「基礎英語力養成期」、2年次は「理工英語力養成期」、3年次は「理工英語実践期」、4年次は「理工専門分野英語実践期」として、基礎から応用、そして一般英語から理工学英語へと進むようにデザインされている（下図）。2016年度より2週間程度の海外語学留学プログラムの修了者に対して、レポート提出などを組み合わせて1単位を与える授業科目である海外短期理工学英語研修Ⅰ・Ⅱもスタートさせている。2019年度より理工系英語プレゼンテーションは2年次からも履修できるようになっている。



第二外国語科目については、ドイツ語、中国語、韓国語（朝鮮語）、フランス語、スペイン語が、それぞれ「Ⅰ」（入門）と「Ⅱ」（入門を履修し終わった者向け）を2021年度より総合科目のうち英語科目以外の選択科目として開講している。

各科目の履修年次および単位数は下記の通りである。

「英語科目」

- ・1年次 English Basic Skills Ⅰ（前期2単位）
English Basic Skills Ⅱ（後期2単位）

- English Advanced Skills I (前期 2 単位)
- English Advanced Skills II (後期 2 単位)
- English Remedial Course I (前期 2 単位) (リメディアル・自由科目)
- English Remedial Course II (後期 2 単位) (リメディアル・自由科目)
- ・ 2 年次
 - English for Science and Technology I (前期 2 単位)
 - English for Science and Technology II (後期 2 単位)
- ・ 2・3 年次 理工系英語プレゼンテーション (前期、後期・2 単位)
- ・ 3 年次 語学検定対策講座 (前期、後期 2 単位)
- ・ 集中講義等 (1 年次～4 年次)
 - 学外英語検定 I・II (前期、後期・各 2 単位)
 - 海外英語研修 I・II (前期、後期・各 2 単位)
 - 海外短期理工学英語研修 I・II (前期、後期・各 1 単位)
- 「第二外国語科目」
 - ・ 1 年次以上 中国語 I・II、韓国・朝鮮語 I・II、スペイン語 I・II
 - ドイツ語 I・II、フランス語 I・II (前期、後期・各 2 単位)

本学部の外国語教育では第一章で述べた学部の外国語教育基本方針に則り授業内外の学生の学習を活性化し効果的に教育を行うための様々な措置を講じている。

1. 基礎的な学術英語から理工系の実践的な英語に進む道筋を明確にしたカリキュラム

カリキュラムに沿った学習に効果的な統一教材を用いている。1 年次の English Basic Skills および English Advanced Skills はアカデミックな表現を習得する目的に適った教材を用い、2 年次の English for Science and Technology は理工系の場面での表現方法を磨く教材を用いている

2. 理工系のプレゼンテーションや、語学検定への対策授業

理工系英語プレゼンテーションの授業では、3 年生を中心に、2019 年度より動機の高い 2 年生にも履修を広げ、高度な英語授業を進めている。履修学生が「グローバル人材育成教育学会第二回関東支部大会」で優勝するなどの成果をあげている。

3. TOEIC IP 受験による目標の可視化

本学部の英語教育は、ビジネス場面に限らず広く理工系の実践的な英語力を涵養することを目標としているため、授業は TOEIC スコアの向上のためだけにあるのではないことに留意すべきであるが、ある面では学生の英語力の評価基準となることから TOEIC (L&R) の受験を推奨し 4 年進級時の達成目標を定めている。また 1 年次と 2 年次の英語授業受講者は各学期末に TOEIC (L&R) 受験を義務とし、これらの TOEIC (L&R) のスコアはクラス分けと成績の一部評価に使用されている。

4. レベル別クラス編制

1・2 年次の英語授業ではレベル別クラス編制を採用している。TOEIC (L&R) の高い基準点を超えている学生に関しては、レベルが高いクラスである English Advanced

Skills を履修するようにした。English Advanced Skills の履修者は、成績においてはレベルが高いことを考慮し、成績が低くならないように加点している。English for Science and Technology においても、レベル別クラス編制にして、同様の考慮をしている。

5. 英語リメディアルクラス

TOEIC (L&R) のスコアを評価基準として英語の基礎学力が不足していると判定された学生の English Basic Skills の単位取得に際しリメディアルクラスである English Remedial Course の単位の取得を条件としている。これにより標準クラス English Basic Skills の授業についていくことが容易でないと思われる学生にリメディアルクラス利用を促している。

6. 英語学習サポート室

2015 年度より大学会館に英語学習サポート室を新設し、英語学習の相談に行くことができるようにしている。平日毎日開室し、経験豊かな教員が曜日ごとに常駐している。担当教員は English Remedial Course の授業も受け持ち、受講学生の補習指導などにも活用している。2020 年度より新型コロナ感染症等の感染症流行時にも配慮し、オンライン対応もしている。ラーニングマネジメントシステム (LMS) 上の外国語学習サポート室コミュニティから質問フォームにアクセスでき、担当教員がそれに回答し、学生に届く仕組みになっている。Zoom やメールなどでの指導も併用し、その後担当教員が指導記録をまとめている。2020 年度および 2021 年度の平均利用者数延べ 1500 名程度であった。2022 年度前期は延べ 400 名以上の学生が本サポート室を利用している。

7. E-learning

1 年次と 2 年次の英語授業において授業時間外に E-learning で自習できるようにしている。また 3 年次から 4 年次に進級するときに TOEIC (L&R) のスコアが 470 点以上であることを目標としているが、達成していない学生には E-learning を課している。

8. 海外語学研修

研修先も増え、海外英語研修への参加が年々増加している。

海外英語研修 2015 年度 14 名 (夏季プログラム)

2016 年度 53 名

海外英語研修および海外短期理工学英語研修

2017 年度 139 名

2018 年度 155 名

2019 年度 243 名

2020 年度・2021 年度については新型コロナ感染症流行により研修が中止となった一方、新しくオンラインでの英語研修を開始した。2021 年度は 92 名がオンラインでの

英語研修を修了した。これは 2020 年度の 37 名から大幅に増えており、オンラインでの英語研修が定着してきたことが考えられる。

新型コロナ感染症流行により 2020 年度語学通常授業は多くがオンライン形式で実施していたが、2021 年度理工系英語プレゼンテーション等一部の授業では、対面とオンラインのハイブリッド形式の授業を行った。チャット機能の活用などオンライン形式ならではの工夫を用いた授業が行われた。2022 年度より多くが対面形式で実施している。

本学部の外国語教育の成績評価については、各学期毎にシラバスの「評価方法と基準」に記載し大学ホームページで公表している。また、各授業でシラバスで講師が予め設定した「達成目標」に対し、学生が自身の学習成果を振り返り自己評価するという学生調査を行い、その結果は授業改善に結びつけられるよう講師にフィードバックされている。

外国語教育課程及びその内容、方法の適切性については、2015 年度より 5 学科からの委員によって構成される語学ワーキンググループにおいて主に 4 年次の英語補習について議論してきたが、2020 年度末までで一旦解散し、2021 年度は語学部会委員のみで担当することになった。2021 年度以降は、英語については TOEIC (L&R) などの試験結果などを踏まえ、また 2022 年度前期には、第二外国語については異文化対処能力についての振り返りのアンケート結果などを踏まえ、語学部会にて定期的な会合やメーリングリストのやり取りを通じて点検・評価を施行している、もしくは新たに行う。そうした結果をシラバスの改善や施策の提案に役立て、必要に応じて共通科目委員会にて審議している。

〈2〉長所・特色

本学部の外国語教育の長所・特色と考えられるのは、学修・教育目標のひとつである「地球的観点から多面的に物事を考える幅広い教養を備え、他分野・異文化と相互理解・交流し、社会や世界の問題解決に取り組み、高い倫理観を持った理工学人材として行動できる。」に沿い、学生その他分野・異文化コミュニケーション力の高いグローバル理工系人材育成のため、複数学科混成で教育していること、第二外国語科目の設置により多言語や異文化に触れる機会を学生に提供している点である。第二外国語科目は、学部のポリシーや学修・教育到達目標 A-2 に照らしあわせ、「未知のことば、異なる文化や価値観への理解と対応力を養う」授業として開講している。他学部よりも海外留学やグローバル・プロジェクト・ベースト・ラーニングを念頭に毎学期の受講希望がある。

〈3〉問題点

本学部の外国語教育の長所・特色としてあげられる一方、複数学科混成のクラス編制は、時間割策定の困難さや入学当初の英語力の差が大きい可能性がある。前者は教職員の協力のもと、学生の希望に沿いつつ時間割作成を行っている。後者は基本方針に述べられているように、レベル別クラス編制の他、標準クラスについていくことが容易ではないと思われる学生に英語リメディアルクラスの利用を促し支援を行っている。また、英語学習

サポート室担当の講師陣が、英語力の異なる学生に個別に対応できるよう、授業時間外にも学習相談に応じている。サポート室の利用をさらに促進するため、今後授業とのさらなる連携や国際プログラムとの連携等の検討が必要かと考えられる。2022 年度前期には、国際プログラム履修生のうち、外部の英語能力検定を受験希望者に、検定結果をもとに、サポート室での英語能力伸長のための相談するよう推奨したが、まだ数は少ない。

1・2 年次の英語授業では英語力の多面的評価として TOEIC (L&R) テストを各学期末に行っているが、2020 年度後期より 2021 年度後期まで新型コロナウイルス感染症流行により対面式の一斉施行が難しくなっていた。2022 年度以降、感染状況を踏まえた上で対面式の一斉施行を行うことを予定している。

〈 4 〉 全体のまとめ

学部の外国語教育についての基本方針と個々の教育内容・方法との整合性を保ちつつ、効果的な教育に向けて改善・向上を重ねている。

〈 5 〉 根拠資料一覧

- 資料 2-1 学修の手引き <https://www.shibaura-it.ac.jp/visitor/student/class.html>
- 資料 2-2 シラバス <http://syllabus.sic.shibaura-it.ac.jp>

第3章 学生の受け入れ

〈1〉現状説明

本学のアドミッション・ポリシーで「大学において幅広い教養と経験、さらにコミュニケーション能力を身につけ、世界が多様であることを意識しながら市民社会の一員としての責務を自覚し、人類の進歩と地球環境の保全に尽くすとの気概を持つ人」を求める人物像のひとつにあげている。さらに、本学部の特徴は分野横断領域型の教育であり、外国語教育においても世界の多様性を意識しながら他学科の学生とお互いを認め合い共に向上しあえるよう学科混成かつ学生主体の授業を目指している。

そのため、学生の受け入れに関し、授業形態に配慮して1クラスあたりの学生数が適切になるように努めている。具体的には、1・2年次の外国語クラスでは、学生同士のペアワークやグループワークを中心としたアクティブラーニングを効率よく行うために、各クラス25名以下のクラス編制の実施を目標としている。レベル別クラス編制にあたっては、標準クラスや上級クラス双方で1クラスあたりの学生数が適切になるよう各学期ごとに基準点を決めている。リメディアルクラスにおいては、担当講師からのより多くの個別の支援が必要と考えられるため、標準クラスの半分以下の定員によるクラス編制の実施を目標としている。

本学部では、国際性より豊かな理工系人材育成のため第二外国語科目の設置により多言語・多文化に触れる機会を本学部学生に提供しているが、1クラスあたりの学生数が適切な限りにおいて他学部学生からも他学部受講申請を受け付け、その受け入れを随時検討している。

クラス編制を含め、学生の受け入れの適切性については、期中・期前後で関係部署（学生課）より報告を受け、部会での定期的な見直しの他、担当講師とも連携し都度検討をしている。

〈2〉長所・特色

グローバル社会で活躍するための柔軟なコミュニケーション能力を備えた人材の育成を目指し、全学科に国際プログラムが設置されていることも踏まえ、授業形態に配慮し学生のレベルに応じたクラス編制を行っている。

〈3〉問題点

1・2年次の英語授業ではレベル別クラス編制を採用しているが、レベル判定に利用する判断基準としてのTOEIC（L&R）テストを入学時に行う事が新型コロナウイルス感染症流行により難しかった。2020年度および2021年度は入学時のTOEIC（L&R）テストが難しかったため、入学者選抜における成績や提出書類を英語力の判断材料としてレベル別クラス分けを

行った。2022 年度は入学時の TOEIC (L&R)テストを行い、統一的な評価基準となる試験結果としてレベル別クラス編制にも利用したが、すべての学生の受験が可能ではない為、「ヨーロッパ言語共通参照枠」(Common European Framework of Reference for Languages; CEFR)など外国語の習熟度や運用能力を同一の基準で評価する国際標準も積極的に用いることが必要と思われる。

〈 4 〉 全体のまとめ

学科混成かつ学生主体の外国語授業であることを考慮し適切な学生数に努めた学生の受け入れを行っている。

〈 5 〉 根拠資料一覧

- ・ 資料 3-1 : アドミッションポリシー

https://www.shibaura-it.ac.jp/faculty/systems_engineering_and_science/policy.html

第4章 教員・教員組織

〈1〉現状説明

現在、本学部の語学部会委員は専任教員の教授3名である。全ての専任教員が学科に所属し、学科での教育と共に学部の外国語教育運営やシステム工学演習を担当している。

特任講師の定年退職・人事制度変更により2021年度後期の英語科目および英語学習サポート室は上記の語学部会の専任教員3名に非常勤講師15名を加えた18名で、2022年度前期はほぼ同人数で担当している。1年生の英語担当にはリーディングとライティングを中心とした基礎学術英語の英語教育の経験のある教員を採用し、2年生の英語担当には可能な限り理工系英語の英語教育の経験のある教員を採用できている。学内のFD研究会における教授法研究の他、電子図書の出版社の担当者によるガイダンス等、電子コンテンツを用いコンピュータ支援による外国語教育法(CALL)の例を学ぶ機会を設けている。

第二外国語担当は非常勤講師6名で構成されており、教授する言語のネイティブか、ネイティブに近い日本人講師を配し、学生にとって初めての言語を教えるのに適した経験豊かな講師陣となっている。また外国語能力の伸長にとどまらず異文化や他者理解の視点でものごとを考えることにも役立つ授業を行っている。

いずれも担当教員の採用選考過程では公募にて教育研究業績等の書類選考後に可能な限り模擬授業を含めた面接を行った上で適性判断、候補者を決定し、学内の承認手順を経て採用している。

〈2〉長所・特色

本学部では、外国語教育といった共通科目を担当する専任教員が各学科に所属していることで、各学科と共通科目運営の連携をより緊密に進められるような体制を維持している。本来の専門性に加え、異文化理解教育やコンピュータ支援による外国語教育法(CALL)による教育にも関心の高い教員が多い。

〈3〉問題点

第一章での中長期的な方針および施策の継続だけでなく改善・拡充も行うならば、教員体制のさらなる強化も必要かと考えられる。

〈4〉全体のまとめ

学科に所属し学科との連携を持つ専任教員が担当講師らと協力しながら学科混成の外国語教育を進めることで学部の目的に沿った教育内容の充実ができている。

以上